

症例3 自分の家にいるのに

『家に帰る』と言う

- ・ C氏 75才. 女性
- ・ 特記すべき既往症はなし

主症状

症状〔1〕群 3～4年前から物忘れが進む。現在ではトイレの場所もわからないときがある。日付けは教えてもすぐ忘れる。

症状〔2〕群 2年前、長男は家を新しく建て替えたが、同居していた母親のCは「ここは家ではない。家へ帰ろう」と長男に向かって言い出した。長男が説明しても理解しない。
最近では自分勝手に外出する。夕方まで帰って来ないこともある。

生活歴

Cは同胞6名の第3子で長女。働き者で、結婚後は衣料品店を営む夫を助けてきた。子供は男の子が4名。夫は15年前、胃癌で亡くなった。Cは、現在長男家族と暮らしている。長男夫婦は共働きで、孫は大学生と高校生の2名。

【メモ-1】

孫たちの幼かった頃は、Cは幸せであった。孫たちと仲良く遊び、頼りにもされていた。家庭内での役割もきちんと受け持っていた。しかし、孫たちは成長すると、あまりCを相手にしなくなった。息子夫婦もCと付き合う時間は限られたものであった。Cは年をとるにつれ、意欲的になれるような出来事が生活のなかから次第に減った。夢や希望もなくなっていった。何もすることのない、孤独感ばかりが強い日々が続いた。

このような生活では認知症が始まる。当然のように『物忘れ』が進行してきた。

【メモ-2】

- ① 優しい人(祖父母・両親・兄弟など)たちが居て楽しく過ごした家。そこは自分が生まれ育った家、自分の願いや要求がかなえられる昔の家、『しあわせ』のある家、『自己実現』のある家。
- ② 夫や子供たちに信頼・尊敬・感謝されていた頃の家、自分の能力や優しさを認めてくれた家族の居る昔の家。自分に『存在価値』のあった家。

上記①か②の家へもう一度戻らなければこのまま認知症が進行してしまうことを、Cの生命がもつ無意識的な能力は知っている。

Cは昔の家を探しに行くようになった。道に迷うようにもなった。夕方までに家へ帰れなくなった。要するに、Cにとって淋しくてつまらない今の家には、『家』として認めることのできる『しあわせ』、昔から願っていた『しあわせ』がなかったのである。

Cにとって『家』とは、優しい家族が居て、皆で協力し合い、苦勞をしながらでも『しあわせ』を囲んでいる場所としか考えられなかったのである。

【メモ-3】

足・腰などが悪く自分で外出ができなかったり、外出を許可されなかったりする高齢者の場合には、住んでいる家のまわりや、自分の部屋の窓の外などに、昔の優しかった人(今は故人であっても)が来てくれていることがある。その時は「～がドアの外にきている」「～が窓の外にいる」などと高齢者は思っている。家族に「誰か来ている」と訴えることもある。いずれにしても、やがて高齢者はそのような人たちと家の外と内で話を始める。このような高齢者は、独りごとを言っているとしか家族や我々には見えない。

このような優しかった人たちが家の中に入り込んでいる場合もある。それは、鏡の中であることが多い。話し合っている高齢者は、鏡に映っているのが自分だとは思っていない。

【メモ-4】

淋しさ・悲しさ・孤独などの日々が続くと、Cの認知症は進行する。これは認知能力だけではなく、Cの生命の存続にとっても危険な日々である。Cはこの危機から逃れるために、意識的に優しかった人たちを呼び寄せているのではない。

Cは懐かしくそれらの人たちを思い出しているだけである。

意識的にCが視力や聴力を鋭くしているのでもない。Cには姿や声が見えたり、聞こえたりするだけである。

Cはその幻覚からは受身なのである。何かCにそうさせているのである。何かCに幻覚・妄想を起こさせているのである。

(「何か」については後述)

【考察-1】

認知症のある時期には、高齢者が願っていることの実現に協力するかのように、高齢者には周囲が見えたり、思えたりする。

認知症のある時期に出現する幻覚・妄想状態には、主に次の2通りがある。

- ① 「昔、優しかったあの人たちに会いたい」と願っているような場合に、願いの実現に協力するかのように高齢者にはその人に会えたり、周囲が見えたり、思えたりする幻覚・妄想
- ② 淋しい、悲しい、つらいなどの日々が続いて、高齢者が感情的な限界状態に到っているときに出現する幻覚・妄想

①の幻覚・妄想は、高齢者の思考に答える幻覚・妄想である。

②の幻覚・妄想は、我々には気付くこともできない生命のもつ意志が、幻覚・妄想を使用して高齢者を悲しみや孤独から救出する。つまり、思考や感覚器が、高齢者の生命のもつ、我々には意識することもできない意志に支配されるのである。

この症例の場合は、幻覚・妄想によって、認知症を進行させる孤独で淋しい『現在』を、楽しかった『過去』に変容させて認知能力の低下を防いでいるのである。

【考察-2】 (仮説)

一般的な思考、あるいは記憶が顕在化されない潜在意識による行動と、生命のもつ生きようとする意志による行動とを、区別する必要がある。